The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	完了表現のBE/HAVEの生起条件とAGREE理論
Author(s)	村田, 和久
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2009, 43, p. 79-93
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/9213
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

完了表現のBE/HAVEの生起条件とAGREE理論

村　田　和　久

1．はじめに

比較的限られた言語では、完了形において、特定の動詞タイプについてはBEに相当する完了助動詞が、その他についてはHAVEに相当するものが選択される現象がある。これを一般的には助動詞選択現象という。現代英語ではこの区別がほぼ消滅しているが、かつては確かに見られた区別である。

(1) a.　Chaos is come again.[1)]（= Chaos has come again.）
　　b.　The boy has sung.（*The boy is sung.[2)]）
　　c.　The girl has finished her drink.（*The girl is finished her drink.）

この現象は、現代ドイツ語(sein/haben[3)])、現代イタリア語(essere/avere)、現代オランダ語(zijn/hebben)、現代バスク語(izan/edun)などで比較的維持されており、さまざまな研究がなされている(Burzio（1986），Kayne（1993），Hoekstra（1984,1999），Yanagi（1999），Lieber and Baayen（1997），Arregi（2004）など)。とりわけ、統語的・意味的に動詞のタイプを分析する上で重要な帰結をもたらすと考えられる現象である。

2．理論上の導入

2.1 非対格動詞と非能格動詞

本稿は多くの先行研究に従い、自動詞を大きく２つに分類する。

(2) a．非対格動詞
　　i．他動詞形のあるもの[4)]
　　break, sink, freeze, melt など
　　ii．他動詞形のないもの
　　exist, appear, go, come など
　b．非能格動詞
　　i．主語に意図性のあるもの
　　sing, run, walk, work など
　　ii．主語に意図性のないもの
　　bleed, cry, sneeze, cough など

非対格動詞（特に他動詞形のないもの）は存在文（英語の there 構文など）(3)、場所句倒置文(4)などを許し、一方で非能格動詞は同族目的語(5)、非人称受動文(6)、迷惑受身(7)などを許す傾向にあるといわれる。

(3) a．The day she was buried, there came a fall of snow.[5)]
　　b．*The day she was buried, there cried some children.
(4) a．In the factory appeared several boys.
　　b．*In the factory worked several boys.
(5) a．*The man appeared a good appearance.
　　b．The man fought a heroic fight.
(6) a．*In dit weeshuis wordt er door de kinderen erg snel gegroeid.
　　'In this orphanage it is grown by the children very fast.'

b.　Hier wordt (er) veel gewerkt.
　'It is worked here a lot.'
(Dutch; Perlmutter (1978: 168-169))

(7) a. * 花子は太郎に存在された。
　b.　花子は太郎に泣かれた。

第１節で「特定の動詞タイプ」と言ったものは、(2a)の非対格動詞に他ならない。すなわち、助動詞選択現象も動詞タイプの判断に用いることができる（ドイツ語、イタリア語、オランダ語、バスク語[6)]）。

(8) a.　... dass Peter ins Kino gegangen ist.
　b.　... dass Peter im Kino gearbeitet hat.
(9) a.　Mario è andato a teatro.
　b.　Mario ha lavorato in teatro.
(10) a.　... dat Jan naar het theater gegaan ist.
　b.　... dat Jan in het theater gewerkt heeft.
(8)′-(10)′: a.　'(... that) P/M/J went to the theater.'
　b.　'(... that) P/M/J worked in the theater.'
(11) a.　Jon-Ø　Bilbo-ra　joa-n　d-a.
　Jon-A　Bilbao-to　go-PRF　3.s.Agr$_2$-be
　'Jon has gone to Bilbao.'　(Arregi (2004: 2))
　b.　Jon-ek　barre-Ø　egi-n　d-u-Ø.
　Jon-E　laugh-A　do-PRF　3.s.Arg$_2$-have-3.s.Arg$_1$
　'Jon has laughed.'　(ibid.: 4)

いずれの言語でも、非対格動詞ならばBEに相当する助動詞が、非能格動詞ならばHAVEに相当する助動詞が用いられているのが分かる。実際はここまで簡単に線引きができないものであるが、本稿では便宜上、単純化して扱うことにする。

2.2 AGREE 理論

AGREE は agreement よりも広い意味で捉えるべき用語である。すなわち、言語学上の agreement （一致）は、例えば名詞が関連要素（述語や決定詞など）に性・数・人称・格で変化を生じさせる現象などを指す(12)が、 AGREE はそのほか、広く統語上の現象を説明するのに用いられる(13)。

(12) Agreement （チェコ語）[7)]

a.	Kníže-*ø* prince-M.SG.NOM	Křesomysl-*ø* Křesomysl-M.SG.NOM	zemřel-*ø*. died-M.SG
b.	Kněžn-*a* princess-F.SG.NOM	Ludmil-*a* Ludmila-F.SG.NOM	zemřel-*a*. died-F.SG
c.	Jedn-*o* one-N.SG.NOM	tel-*e* calf-N.SG.NOM	zemřel-*o*. died-N.SG

(13) AGREE

a. Goal as well as probe must be active for Agree to apply.

b. α must have a complete set of ϕ-features (it must be ϕ-complete) to delete uninterpretable features of the paired matching element β.

(Chomsky (2001: 6))

具体的にするために、以下で AGREE を用いて主格認可を説明する。(14a)は他動詞や非能格動詞、(14b)は非対格動詞の一般的な統語構造である。

(14) a. $[_{TP}$ T $[_{vP}$ SUBJ v $[_{VP}$ ... $]]]$

b. $[_{TP}$ T $[_{vP}$ v $[_{VP}$ V SUBJ$]]]$

T は定形文における時制（tense）要素であるとする。少なくとも英語で

は、主格主語が生じる場合は定形文であるのが原則で、また定形文であれば主格主語を持つのが原則である。定形文には一般的に明確な時制があるから、さまざまな分析において、主格と時制は関連づけられてきた。SUBJ の位置に生じる名詞要素は、述語との位置関係に依存しない、それ自身の特性として、数・人称・性などを持っている。Boys であれば「複数・三人称・男性」である。これをφ素性（φ-feature）と呼ぶ。また、述語との位置関係によって（文法）格が決定する。“The boys ran in the park”であれば主格、“He scolded the boys”であれば直接目的格（対格）など。格素性は統語論で「後天的」に与えられるものであるので、当該名詞自体の性質ではなく、何らかの統語的操作でこれを認可する必要がある。このような素性を「解釈不可能素性」という。

(15)　… T　　… [the boys] …
　　【時制】　　【φ】
　　［φ］　　［格］　　（【解釈可能】、［解釈不可能］）

一方、T は「時制」であるから、「現在」「過去」などの時制素性（解釈可能）を持つ。しかし、(13b) にあるように、T（＝α）と [the boys]（＝β）の間で AGREE が適用されるなら、T には [the boys] と適合するφ素性がなければならない（この結果、英語でいう「三単現の-s」などが生じる）。もちろん T 自体には本来φ素性は不要であるから、これも解釈不可能素性である。T と [the boys] は、適合するφ素性をきっかけに AGREE 関係を結び、その下で［格］は［主格］となり、互いが互いの解釈不可能素性を削除する。残るのは T の【時制】と [the boys] の【φ】である。

同じメカニズムで対格認可も説明されるが、ここでは図示のみで説明は省くこととする。

(16)　…　v^*　　…［ the boys ］…
　　［ϕ］　　【ϕ】
　　［格］

（v^* はϕ-complete であることを示す。これは対格を認可できることとほぼ同義である。）

第 3 節では、この AGREE 理論を助動詞選択現象に適用する。なお、Chomsky は(13b)のようにϕ素性を AGREE の条件の一つと見なしているが、実際はこれにとらわれる必要はなく、本稿もϕ素性が直接関わらない状況下において AGREE を適用することがある。

3．提案と分析

本稿では、次のような基本構造に対し、AGREE 理論を適用することで（基本的な）助動詞選択を説明する。VP の主要部（cry や arrive）は、派生の過程ですぐ上の v^*/v に移動し、v + V を構成する。ここでは v + V が完了分詞（cried や arrived）であるから、v は完了分詞語尾(-en)である。完了助動詞は上位の vP 主要部に生じると仮定する。EA は外項、IA は内項を表すものとし、(17a)が他動詞や非能格動詞、(17b)が非対格動詞の統語構造を示している。

(17) a.　…［$_{v\mathrm{P}}$ v［$_{v^*\mathrm{P}}$ EA v^*［$_{\mathrm{VP}}$［$_{\mathrm{V}}$ *cry*］(IA) ］］］
　　b.　…［$_{v\mathrm{P}}$ v［$_{v\mathrm{P}}$ v［$_{\mathrm{VP}}$［$_{\mathrm{V}}$ *arrive*］IA］］］

既に見ているように、助動詞選択の対立は動詞タイプの対立である。動詞タイプの対立は原則としてϕ-completeness に対応する。すなわち、動詞タイプとϕ-completeness、助動詞選択の対応は以下の表のように図示できる。

<table>
<tr><th colspan="2">動詞タイプ</th><th>v の性質</th><th>助動詞</th></tr>
<tr><td colspan="2">他動詞</td><td rowspan="2">ϕ-complete</td><td rowspan="2">HAVE</td></tr>
<tr><td rowspan="2">自動詞</td><td>非能格動詞</td></tr>
<tr><td></td><td>非対格動詞</td><td>ϕ-incomplete</td><td>BE</td></tr>
</table>

ここで、下位 v の ϕ-completeness を何らかの素性([F])の有無に帰着（あるいは関連）させることにしよう（その素性 F の具体的内容については、紙幅の都合上、別稿にて述べることにしたい)。なお、(18)の構造においては内項・外項をそれぞれ表示していない。

(18) a. $[_{vP}$ v $[_{v^*P}$ v^* $[_{VP}$ $[_{V}$ *cry*$]$ ... $]]]$
[F]　【F】

b. $[_{vP}$ v $[_{vP}$ v $[_{VP}$ $[_{V}$ *arrive*$]$ ... $]]]$
[F]

一つの重要な仮定として、上位 v が持つ素性[F]は解釈不可能なものであり、下位 v^* に生じる[F]は解釈可能なものであるとする。(18a)の v と v^* は、v^* を c-command（概略、上位が下位を支配下に置く）する側の v が解釈不可能素性を持っており、AGREE が適用できないのではないかという指摘がなされるかもしれないが、両者には[F]以外にもペアをなす素性（例えば(19)のような素性ペア）が想定でき、これによって上記の批判を回避できる。

(19) $[_{vP}$ v $[_{vP}$ v/v^* $[_{VP}$ V ... $]]]$
【完了】　[完了]

２つの v (v^*)は「完了素性」を持ち、分詞がもつ完了素性が解釈可能、助動詞が持つものが解釈不可能であるとする。助動詞の持つ解釈不可能素性は、分詞が持つ適合(matching)素性によって照合され、削除される。

これらは [F]とは見なせない。それは、「完了素性」がそれぞれの v (*)

にとって不可欠な素性であり、(18b)のように一方の *v* においてどちらかの素性が欠落していてはならないためである。

さて、AGREE の定義(13a)によれば、Probe と Goal はともに active でなければならない。「active である」とは、Chomsky (2001: 4)によれば“… the uninterpretable features of [a goal] and [a related probe] render their relevant subparts *active*, so that matching leads to agreement”ということであるから、Probe と Goal がそれぞれ別々に(相手が持っている解釈可能素性と適合する)解釈不可能素性を持っていなければならない。「適合する(match)」とは「素性の同一性」(Chomsky (2000: 122 (40a)), (2001: 5))のことであるから、AGREE が適用されるには、互いに適合し、一方が解釈不可能である素性の対が少なくとも 2 つ以上なくてはならず、その対は原則として 1 組の Probe-Goal が有するものでなければならない。

以上の定義に照らせば、(18)と(19)の素性設定で AGREE が適用しうることはもはや自明である。(18a)において、上位 *v* の持つ解釈不可能な素性[F]によって当該 *v* は active になり、適合する Goal たる下位の *v* を探し当てる。ここに AGREE 関係が成り立ち、Probe である上位 *v* の解釈不可能素性は Goal によって「不活性」となる。同時に、(19)において下位 *v* が持つ解釈不可能な完了素性にも値が付与され、不活性になる。Probe-Goal の関係にあった上位・下位 *v* はそれぞれ互いの解釈不可能素性を不活性にしたので、派生はそのまま進行する。

一方、非対格動詞の場合は多少異なる部分がある。すなわち、(18b)において上位 *v* は解釈不可能な素性[F]を有するが、これと適合する解釈可能素性[F]を持つ要素がないのである。このような場合では、(13a)にあるように Probe-Goal 関係が成り立たないため、(19)の下位 *v* が持つ解釈不可能素性が不活性化されず、派生の進行が妨げられる。このままでは派生の破綻は免れないが、一つの回避条件群として、以下を仮定しよう。

(20) a. 適当な Goal を持たない Probe は、適合する解釈可能素性を持つ主要部の併合によって不活性化しうる (head-head inactivation)。

b. 適合する解釈可能・解釈不可能素性対を持つが、Goal が Probe を c-command している配列においては、AGREE 待ちの状態であるとみなす(AGREE in queue)。

c. Goal が head-head inactivation によって不活性化すれば、AGREE-in-queue にあった要素対に AGREE 関係が確立する (forced AGREE)。

(20)の条件群は stipulation の域を出ない臨時のものであると言わざるを得ないが、ここでは経験的・概念的論証なしに妥当なものであると見なしておく (Hiraiwa (2005)が主張する Multiple AGREE 関係の 1 つである centrosymmetry (cf. p.18 (1.3 b))の特殊な例と見なすことも可能)。

(18b)の上位 v が持つ解釈不可能素性[F]は、適合する[F]を持つ要素の併合により不活性化されうる (∵(20a))。また、(19)では Goal が Probe を c-command しており、AGREE を待つ状態である (∵(20b))。いま、当該 Goal は適切に不活性化する要件が整っており、同時に上位・下位 v の対には AGREE 関係が成り立つ (∵(20c))。

以上に見たように、上位 v の不活性化の方法は下位 v のタイプ (あるいは素性構成) によって異なる。もっとも本質的な部分は以下のように述べられる。

(21) a. ϕ-complete な v を選択する上位 v は、AGREE によって不活性化する ([$_{vP}$ [$_{v}$ ~~[F]~~] …]])。

b. ϕ-incomplete な v を選択する上位 v は、(20a)を満たすような別の要素 X の併合によって不活性化する([$_{vP}$ [$_{v}$ X + v ~~[F]~~]])。

この統語条件(21)は、助動詞選択が観察される言語の完了構文においては、以下の音声化条件(22)が適用されるものとする。

(22) a. $[_{v}X + v\ \cancel{[F]}] \rightarrow X = BE$

b. $[_{v}\ \cancel{[F]}] \rightarrow$ HAVE, otherwise.

本節では、AGREE 理論に基づき、非対格動詞と非能格動詞の（下位）v が持つ素性の違いが助動詞選択の違いを引き起こしている事実を説明した。

4．結論と今後の課題

本稿は、オランダ語やイタリア語等に見られる助動詞選択現象を扱い、動詞タイプによって異なる完了助動詞が選択される事実を、AGREE 理論に基づいて説明しようと試みた。あくまで理論上の要請である素性[F]の具体的内容と、仮定(20)の妥当性は今後さらに研究を進めていく必要があるが、これらが実証されれば、助動詞選択現象に対して有力な説明になるものと思われる。

しかし、助動詞選択現象は(1)や(8)-(11)に例示したものばかりではなく、少なくともオランダ語、イタリア語、ドイツ語などにおいては以下のような事実もまた観察されている。

(23) a. Ugo è corso a casa.
Ugo is run to home
'Ugo ran home.' (Italian: C. Rosen 1984: 67)

b. Jan is naar de school gelopen.
Jan is to the school walked
'Jan has walked to the school.'
(Dutch: Lieber and Baayen 1997: 809)

以上のデータに共通して見られる特徴は、いずれも着点を示す句が生じている点であり、動詞は本来 HAVE を選択するはずの非能格動詞であるにも関わらず、実際は BE が選択されている。これは、本稿で展開してきた説明では扱いきれるものではなく、さらなる分析が求められる。

一案として、着点を示す前置詞句(PP)に特別の素性を設定し、(18)と(19)に沿う形で AGREE を適用すれば、適切な結果を得ることができる。例えば、非能格動詞に着点を示す PP がつくような場合を以下のように表示してみよう。

(24) $[_{vP}$ v $[_{v^*P}$ v^* $[_{VP}$ $[_{V}$ *cry*$]$ $[_{PP}$ P ...$]]]]$
[F] 【F】 [F]
【完了】 [完了] 【完了】

着点句における【完了】素性は、統語論で具体的に示しうる特性である。(25)のイタリア語の例では、着点を表さない（完了素性を持たない）(25a)の例と、着点を表す（完了素性を持つ）(25b)の例で、選択される助動詞が異なっている上に、「着点性・完了性」を示す時間副詞の選択も異なっている。すなわち、着点 PP の有無が明確な「完了性」の有無に寄与しているのである。

(25) a. Gianni ha corso nel bosco per ore
John has run in.the woods for hours
'John ran in the woods for hours.'

b. Gianni è corso nel bosco in un secondo
John is run in.the woods in one second
'John ran into the woods in one second.'
(Folli and Harley (2005: 101))

ここで(24)の構造に戻ると、派生はより埋め込まれたものから順に進行していくとされているから、最初に Probe-Goal 対を構成しうる要素は、v^*

と P である。これらはいずれも、互いに適合する素性を持ち、どちらもそれぞれ解釈不可能素性を持っているので、AGREE の適用条件を満たしている。v^* が Probe となって Goal の素性[F]を不活性にし、同時に v^* の［完了］素性も不活性になる。不活性になった素性を、取消線で表すと次のようになる。

(26) $[_{v\mathrm{P}}$ v $[_{v^*\mathrm{P}}$ v^* $[_{\mathrm{VP}}$ $[_{\mathrm{V}}$ *cry*$]$ $[_{\mathrm{PP}}$ P ...$]]]]$

[F] 【F】 ~~[F]~~

【完了】 ~~[完了]~~ 【完了】

さて、派生が進行すると上位の v も active であることが判明するが、(13a)の定義によって AGREE 関係は成立しない。また、AGREE が成立する必要もない。というのも、先に仮定した(20a)によって、上位 v の解釈不可能素性[F]は、適合する解釈可能素性を持つ主要部の併合によって不活性化しうるためである。この素性[F]は適合する要素 X の併合によって不活性化し(∵(21b))、(22a)によって助動詞は BE が選択される。

以上のように、第 3 節の分析を拡張すれば助動詞選択現象を幅広く扱うことが可能であるが、本節の冒頭に述べたように、素性[F]の具体的内容と、仮定(20)の妥当性を明らかにすることが今後の重要課題である。

参考文献

Arregi, Karlos (2004) "The *Have/Be* Alternation in Basque," ms., University of Illinois at Urbana-Champaign.

Burzio, Luigi (1986) *Italian Syntax: A Government-Binding Approach*, Reidel, Holland.

Chomsky, Noam (2000) "Minimalist Inquiries: The Framework," in Roger Martin, David Michaels, and Juan Uriagereka (eds.) *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, MIT Press, Cambridge, Mass., 89–155.

Chomsky, Noam (2001) "Derivation by Phase," in Michael Kenstowicz (ed.) *Ken Hale: A Life in Language*, MIT Press, Cambridge/Mass., 1–52.

Folli, Raffaella and Heidi Harley (2005) "Flavors of *v*: Consuming Results in Italian & English," in Paula Kempchinsky and Roumyama Slabakova (eds.) *Aspectual Inquiries*, Springer, Dordrecht, 95–120.

Hiraiwa, Ken (2005) *Dimensions of Symmetry in Syntax*, Ph.D dissertation, MIT.

Hoekstra, Teun (1984) *Transitivity: Grammatical Relations in Government-Binding Theory*, Foris Publications, Dordrecht.

Hoekstra, Teun (1999) "Auxiliary Selection in Dutch," *Natural Language and Linguistic Theory* 17, 67–84.

Kayne, Richard S. (1993) "Toward a Modular Theory of Auxiliary Selection," *Studia Linguistica* 47, 3–31.

Lieber, Rochelle and Harald Baayen (1997) "A Semantic Principle of Auxiliary Selection in Dutch," *Natural Language and Linguistic Theory* 15, 789–845.

Perlmutter, David M. (1978) "Impersonal Passives and the Unaccusative Hypothesis," *BLS* 4, 157–189.

Rosen, Carol (1984) "The Interface between Semantic Roles and Initial Grammatical Relations," in David M. Perlmutter and Carol Rosen (eds.) *Studies in Relational Grammar* 2, University of Chicago Press, Chicago, Ill., 38–77.

Yanagi, Tomohiro (1999) "Verb Movement and the Historical Development of Perfect Constructions in English," *English Linguistics* 16, 436–464.

注

1） William Shakespeare, *Othello*, Act 3, Scene 3, 90–95

2）「*」の記号は、その表現が容認されない、あるいは非文法的であることを示す。

3） be/have の順。以下同じ。

4）これを「能格動詞 ergative verbs」と呼ぶこともあるが、本稿では非対格動詞にまとめる。

5） Emily Brontë, *Wuthering Heights*.

6） Agr_1は能格要素との一致、Agr_2は絶対格要素との一致を示す。

7）略号の意味は次のとおり。A：絶対格、ANM：活動体、E：能格、F：女性、M：男性、N：中性、NOM：主格、PL：複数、PRF：完了語尾、SG：単数。

（大学院博士後期課程学生）

SUMMARY

On the Conditions for *BE/HAVE* Alternation in Perfect Expressions and AGREE Theory

Kazuhisa MURATA

This article deals with the auxiliary alternation phenomenon, a systematic alternation observed in some languages, as exemplified by the German data in (1):

(1) a. … dass Peter ins Kino gegangen ist.
'… that Peter is gone to the theater.'
b. … dass Peter im Kino gearbeitet hat.
'… that Peter has worked in the theater.'

The phenomenon has been a hot topic for the linguistic studies for years, and it is a well-known fact that most of the verbs selecting BE as their perfect auxiliary belong to a class called "unaccusative verbs" and most others selecting HAVE, to "unergative verbs," when restricted to intransitives.

In this article, a new analysis is presented for the auxiliary alternation, with the AGREE-based "Probe-Goal" theory (Chomsky (2000, 2001)) effectively exploited. My proposal crucially involves particular features on the categories heading verbal phrases to account for the systematic distributions of perfect auxiliaries.

The head-centered AGREE theory that I assume here can further be extended to another set of examples, where a goal-denoting phrase is attached and HAVE is selected, though the verb is without doubt unergative.

キーワード：助動詞選択，AGREE，非対格動詞，非能格動詞，素性照合